

養 氣 軒

ようきけん

vol. 106
2024 Autumn

『さわやかな笑顔と思いやりの心で、安心、安全な満足される医療をめざします』
そのために、患者さんは言うまでもなく全職員ひとり一人を大切にします。

106 | 転倒予防の取り組み

●ようきけんとは「病む人の病のみならず心をも癒すことの出来るところ」という意味です。



**NO
MORE
転倒!**



〈転倒 (転ぶ)〉を予防する 新たな取り組みをはじめました

医療安全管理室では、患者さんができるだけ安全に安心して入院生活が送れるよう、様々な活動をしています。今回は、〈転倒予防〉の取り組みを紹介します。

入院は「慣れない環境」や「慣れない履物」「飲んでいる薬の影響」などから、転倒が起きやすい状況になります。そこで、入院する患者さんの日ごろの状況を知り、予防していきたいと考え、入院パンフレットに「転倒・転落予防のための質問用紙」を追加しました。また、服装や歩き方、内服薬や点滴の際の注意点等を説明したパンフレットも作成しています。

安全な入院生活を送っていただくために、患者さんのお気持ちや希望もお伺いして、患者さん・ご家族とともに転倒について考え、一緒に予防していきたいと考えています。

(医療安全管理係長 南 聡美)



「意思伝達装置」をご存じですか？

主任児童指導員 浦川 萌

病気や障害により音声機能を失い、人と会話することが困難になった場合、コミュニケーションを取ることが一生難しいとお思いでしょうか。

実は、国の制度でもある補装具費支給申請制度を利用することで、“意思伝達装置”の支給を受け、他者との日常会話や外部との交流、ネットサーフィンなど行うことが出来ます。

意思伝達装置とは、声の代わりに”自らの意思を伝える機械”であり、見た目はパソコンと同じです。内部に搭載されている特殊なアプリや個人の状態に合わせたマウス（スイッチ）を使用し、操作します。

しかし、制度利用にあたり様々な対象条件がありま

す。意思伝達装置について興味関心がある方は、最寄りの市役所（役場）へ問い合わせいただくことをお勧めいたします。



医療機器研修を行いました

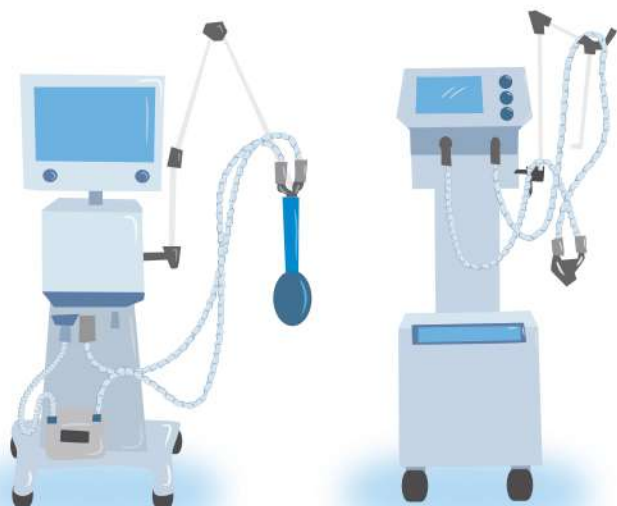
医療機器管理室長 津田 真実

医療機器管理室は、業務のひとつとして院内スタッフを対象とした医療機器に関する研修を行います。当院の8病棟では多くの人工呼吸器が稼働しており、そこで稼働する人工呼吸器は1種類ではなく、数種類あります。

このため新人看護師または他病棟から異動してきた看護師を主な対象として、機種ごとに講習会を行っています。

人工呼吸器を扱うためには、その操作方法に加え、機器と患者をつなぐ呼吸回路の組み立てや交換方法などの知識も必要になります。実機を操作し、アラームを聞き、短時間の講習会でも実務に即した内容で行っています。

医療機器の説明会を介して、医療現場の安全性をより高めるための一助になると期待しています。



病院情報の公表について

医療情報管理係長 **松永 央子**

当院では、「病院情報の公表」として病院指標をホームページに公開しております。

病院指標とは、診断群分類データから厚生労働省が定める「病院情報の公表の集計条件」に基づき、医療の質を数値で示し客観的に評価するものです。

項目は7項目あり、この指標の公表により医療の透明化、質の向上を目的としています。

令和5年度の集計では、診断群分類別患者数は“筋萎縮性側索硬化症”が最も多く、「神経難病の九州地区基幹病院」としての機能を示す結果となりました。

すべての指標には、集計に対するコメントや当院の特色について掲載しております。

令和6年度より指標が3項目追加となり、10月に公開予定ですので是非ご覧ください。



医療情報の有効活用について

総合情報管理室長 **宮崎 哲彦**

現代では身の回りのあらゆるものがインターネットに接続するようになり、世界中の至る所で多種多様な情報が常に発生し、収集・蓄積されています。

このように蓄積された大量の情報をビッグデータと呼んでいますが、医療の世界においてもそのようなデータは非常に重要なものです。

国立病院機構では『国立病院機構診療情報集積基盤』、いわゆる医療ビッグデータの運用を行っており、個人が特定されない状態の診療情報を収集し、厳密な管理のもと多角的な分析を行い、医療の質の向上、臨床研究および経営支援、より良い患者サービスの提供などに活用しています。

また国が主体となりデータヘルス改革の一環として、マイナンバーカードを使った高度なデジタル技術を利用し、セキュアな環境下で医療情報を安全に共有する環境が構築され、患者さんの同意の下、病院等で特定健診情報やレセプト記載の薬剤情報等の医療情報を閲覧できる運用が始まっています。

更に皆さん個人がパソコンやスマートフォン等を用いて、マイナポータルからご自身の医療情報を閲覧で



きる環境も構築され、閲覧できる医療情報自体も拡大しつつあります。

あまり実感が湧かない、よく分からないという方もいらっしゃると思いますが、蓄積された医療情報を効果的に活用していくことで、将来的には皆さんが全国どこでも安心してより適切で迅速な診断や検査・治療等を受けることができるようになり、より健康で豊かな生活を送れるようになるかと予想され、我々医療従事者も今後の更なる発展に大きな期待を寄せているところです。

糖尿病と認知症

統括診療部長 木村 博典

糖尿病のある人は、そうでない人に比べて、認知症のリスクが高いことが知られています。アルツハイマー病には1.5倍、脳血管性認知症には2.5倍なりやすいことが分かっています。

野菜には抗酸化作用のある α -カロテンや β -カロテン、ビタミン類、食物繊維などが豊富に含まれています。こうした栄養が認知機能の低下やアルツハイマー型認知症に予防的に働く可能性があります。

「JPHC研究」は、全国の約14万人の住民を対象に、生活習慣と病気との関連について長期追跡している研究です。その研究結果で、アブラナ科の野菜・緑黄色野菜の摂取量が最も多いグループでは、認知症の発症リスクは男性で13%、女性で15%低いことが明らかになっています。アブラナ科の野菜は、キャベツ、ダイコン、ハクサイ、コマツナ、カブ、ブロッコリー、カリフラワーなど、緑黄色野菜は、ホウレンソウ、ニンジン、ピーマン、トマト、カボ



チャ、インゲン、オクラ、クレソン、サラダ菜、春菊などです。

野菜を食べることが、認知症の発症リスクの低下と関連している理由として、野菜に含まれるビタミンCなどによる抗酸化作用が考えられています。抗酸化物質は、酸化ストレスレベルを低下させることで脳のDNA損傷や認知症の原因となるタンパク質(アミロイド β)の形成を抑制し認知症のリスクを低下させています。

また、過去のJPHC研究では、野菜をよく食べる人は2型糖尿病の発症リスクが低いことも示されています。特に緑の葉野菜やアブラナ科の野菜で、糖尿病リスクは低くなる傾向が示されております。ホウレンソウやコマツナなどの野菜には、インスリン感受性を高めるビタミンCやカロテノイドなどの抗酸化作用のある栄養や食物繊維が多く含まれるためです。

野菜をたくさん食べて糖尿病と認知症を予防しましょう。

部署紹介(危機管理センター)

副看護師長 内野 めぐみ

危機管理センターは、医療安全、感染対策、災害対策など院内の医療安全と感染予防という大きな役割を担う部署です。

医療安全は、職員一人一人が、医療安全の必要性・重要性を自分の課題と認識し、安全な医療を遂行することが最も重要です。医療安全管理室では、インシデント報告に関する情報収集・実態調査、マニュアル遵守状況の確認や指導で各部署の巡回を行い、安全な環境実態確認のための医療安全ラウンドを行っています。

感染対策室は、院内で起こる様々な感染症から患者さんや職員の安全を守るために活動を行う組織です。感染症対策の基本は正しい手指衛生になります。世界保健機構(WHO)では、毎年5月5日前後に感染対策の基本である手指衛生に関するグローバルキャンペーンを展



(キャンペーンで動画を見ている場面です)

開しています。2024年のスローガンは「手指衛生に関する知識を共有することが今でも重要なのはなぜですか?」「それは、医療における有害な細菌の蔓延を阻止するのに役立つからです」となっています。当院では、細菌が伝播する様子がわかるDVDを視聴し、「手指衛生の必要性」について改めてキャンペーンを行いました。

編集後記

主任保育士 松本 明美

新型コロナウイルス感染症が5類となり1年以上が過ぎ、マスクなしの生活スタイルに戻つつあることと比例するように、感染症にも再び流行の兆しがみえます。また今年の夏は連日最高気温が体温以上の箇所も出て酷暑となっていることから、熱中症に関するニュースも多く取り上げられています。更に先日閉幕したパリオリンピック2024では連日熱い熱戦が繰り広げられ、その観戦で寝不足となった方も多くいらっしゃるの

はないでしょうか。いずれにしてもこの暑さで体力が消耗し、体調を崩しやすい環境・状況になっているかと思ひます。

手洗い、うがい、手指消毒、涼しい環境、水分補給および十分な休息と栄養をとり、身体を守り、オリンピック・パラリンピック競技の感動的なパフォーマンス等から心の栄養を得て、健康管理に留意し下半期も元気にお過ごしください。